

研究ノート

大学サッカー選手のスカウトに関する意識

前 田 秀 樹
後 藤 義 一
上 代 圭 子

東京国際大学論叢 人間科学・複合領域研究 第7号 抜刷
2022年（令和4年）3月20日

研究ノート

大学サッカー選手のスカウトに関する意識

前 田 秀 樹
後 藤 義 一
上 代 圭 子

College Soccer Players' Awareness with Respect to Scouting

MAEDA, Hideki
GOTO, Yoshikazu
JODAI, Keiko

Abstract

Universities in Japan have not only intellectual resources as educational and research institutions, but also valuable human resources such as highly competitive athletes and excellent sports leaders. Many universities have physical education and sports facilities, and can be said to be valuable institutions that have revitalized society through sports (Ministry of Education, Culture, Sports, Science and Technology, 2016). Against this background, college soccer has long contributed to the development of excellent soccer players. In recent years, an increasing number of players have gone on to become professionals after college soccer, but there are few studies that focus on scouting, which is the first opportunity in the career process for college students.

Accordingly, in this study, we conducted a questionnaire survey of college soccer players (n = 347) from the same college as in a previous survey five years ago, with the aim of clarifying the significance of college soccer by identifying the awareness and change of awareness of college soccer players when being scout, and clarifying the important points for college soccer players to become professionals.

The results of the survey show that although there are differences in the views of scouts and students on what is important during scouting, students have a better understanding of what scouts and J.League clubs are looking for than before. However, since there is still a certain lack

of awareness, students as well as coaches need to be aware of the kind of player scouts want and develop those area. As a result, we believe that college soccer provides a four-year period in which students can grow as soccer players in terms of both their human qualities and soccer game skills.

Key Words: College soccer players, Scouting, Professional soccer player

目 次

1. 緒論
2. 研究方法と手順
 - 2.1 調査方法
 - 2.2 調査対象
 - 2.3 調査手順
 - 2.4 調査項目
 - 2.5 分析方法
3. 結果
 - 3.1 サンプルの属性
 - 3.2 学生の認識
 - 3.2.1 スカウト時の学生の認識の全体の傾向
 - 3.2.2 スカウト時の学生の認識の学年による比較
 - 3.2.3 スカウト時の学生の認識の出身チームによる比較
 - 3.3 2016年との調査との違い
4. まとめ

1. 緒 論

2011年に制定されたスポーツ基本法は、スポーツに関し、基本理念を定め、並びに国及び地方公共団体の責務並びにスポーツ団体の努力等を明らかにするとともに、スポーツに関する施策の基本となる事項を定めることにより、スポーツに関する施策を総合的かつ計画的に推進し、国民の心身の健全な発達、明るく豊かな国民生活の形成、活力ある社会の実現及び国際社会の調和ある発展に寄与することを目的としている。

そして、翌年2012年に策定されたスポーツ基本計画において、大学にはスポーツに係る豊富な人材や充実した施設を有しているものがあることから、地域スポーツと企業・大学等との連携が掲げられており、スポーツを通じた社会の発展を支える存在として、大学スポーツはこれからも重要なポジションを占めていくものと考えられるとされ、日本の大学には、教育研究機関としての知的資源はもとより、高い競技力を持つアスリートや優秀なスポーツ指導者等の貴重な人材が存在する上、多くの大学において体育・スポーツ施設が整備されており、スポーツを通じて社会を活性化させてきた貴重な機関であると言える（文部科学省、2016）としている。

日本の大学における運動部活動は、各大学で学内の体育会組織への関与の在り方が異なる上に、学校横断的かつ競技横断的な組織である「公益財団法人全国高等学校体育連盟」と異なり、各学生連盟が競技種目別に設立されており、運動部活動全体での一体性を有していない（文部科学省、2016）と言われてきた。そのような中で、大学の運動部活動が持つ様々な資源や公益的な役割を発展させていくため、文部科学省は2016年、「大学スポーツの振興に関する検討会議」を設置して

検討を開始し、その後「日本版NCAA創設に向けた学産官連携協議会」「大学横断的かつ競技横断的組織設立準備委員会」を経て、2019年3月に一般社団法人大学スポーツ協会（以下：UNIVAS）を設立した。UNIVASは、大学スポーツの振興（学生アスリートが生き生きとしてスポーツと学修に取り組む・大学・競技団体が更なる発展を遂げる）と、大学スポーツ参画人口の拡大（大学スポーツに関わる人々を性別や障がいの有無等に関わらず平等に増やしていく）を活動理念（UNIVAS公式HP）とし、大学スポーツの発展に寄与している。このようなことから、国をあげて大学スポーツに期待がされていると言っても過言ではない。

そのひとつが、優秀なアスリートの育成であり、大学サッカーは以前より優秀なサッカー選手の育成に寄与してきた。『フロンターレは、大卒選手を重要視してきた』と話し、川崎フロンターレでは、地に足つけて、フロンターレで長くプレーしてくれる大学生に目をつけてチームの強化を図っていた」（静岡朝日テレビニュース&ブログサイトLOOK HP, 2020年12月18日）とされるなど、近年、大学でプレーするサッカー選手は注目されている。そのような中で、前田ら（2017）は、高校卒業時にプロのレベルに至っていなくても、大学で成長すればプロになれる可能性があることから、大学はプロになるために成長する場としての意義があると考えられる。そしてそのためにも、指導者ならびに学生自身も、スカウトがどのような選手を欲しがっているのかを自覚するべきであるとしている。2016年当時よりも、ますます大学サッカーを経てプロサッカー選手となる者は増加している。だがこの調査から、5年が経過した中で、大学生サッカー選手の意識が変化しているかについては明らかにされていない。

アスリートのキャリアプロセスに関する研究は1980年代より海外において急激に増え、日本においても1990年代から注目されるようになり、多々研究がされてきた（豊田・中込, 1996, 2000；豊田, 1999；大場・徳永, 1999, 2002；重野, 1999；上代, 1999, 2005, 2013；久保田ら, 2002；筑波大学プロジェクト, 2006, 2007；清水・島本, 2011, 2014；生方ら, 2011；木内ら, 2012；八田ら, 2012；古谷ら, 2015；山本ら, 2016；前田ら, 2017；2018a, 2018b；山本・島本, 2019）。だが、キャリアプロセスにおけるファーストキャリアのきっかけとなる「スカウト」に着目した研究や、選手を「取る」側の視点に立ったものは、著者らが2017年に行った研究以降見受けられない。

そこで本研究では、大学サッカーの意義を明らかにすることを目的とし、そして本目的を達成するために、下記3点の副目的を設定する。

- ①大学生サッカー選手のスカウト時の意識を明らかにする。
- ②5年前の大学生サッカー選手と現在の大学生サッカー選手のスカウト時の意識の違いを明らかにする。
- ③大学生サッカー選手がプロになるために重要な点を明らかにする。

2. 研究方法と手順

2.1 調査方法

本調査は、スカウトをされる側である学生を対象とした調査を、インターネットを使用したアンケート調査にて行っている。

2.2 調査対象

関東にある1大学のサッカー部に所属する学生のうち、審判とマネージャーを除いた371名を対

象とした。そのうち有効回答数は347であったことから、回収率は93.5%である。

この大学の学生を対象とした理由について、本調査は5年前の大学生サッカー選手の意識との違いを明らかにする縦断研究であることから、前回と同じ大学を対象とした。またこの大学は、所属人数が多いとともに、関東大学サッカーリーグに所属するだけでなく、社会人リーグである関東サッカーリーグ、埼玉県サッカーリーグなど、多種にわたるリーグで活動している強豪大学である。

2.3 調査手順

各カテゴリーの指導者に本研究の調査目的と内容を説明した後調査のURLを伝え、指導者やマネージャーに本調査の説明をしてもらうとともに、対象学生に調査のURLを伝え、回答してもらう形をとった。

2.4 調査項目

調査項目は、2016年の調査と同じ項目とし、具体的には、個人的属性（学年、所属カテゴリー、高校時代の所属チーム、サッカー暦）、Jクラブのスカウトがスカウト活動をする際に重要視していると思う項目（12項目）、自分の特徴（14項目）、進路を決定する際の重要な他者とした。

質問項目は、2016年の調査当時に、「大学スポーツ界におけるスカウト活動に関する研究」（上代ら、2015）の研究知見および、「地域タレント発掘・育成事業に対する協力ガイドライン」（日本オリンピック委員会、2008）を基に作成し、Jクラブスカウト職経験者、Jクラブ監督経験者ら有識者によって妥当性を確認されたものである。

なお、Jクラブのスカウトがスカウト活動をする際に重要視していると思う項目（12項目）は、「とても重要視する」から「全く重要視しない」、の6段階尺度とし、自分の特徴（14項目）は、「とても当てはまる」から「全く当てはまらない」の6段階尺度とした。また、進路決定における重要な他者は10項目からの複数選択としている。

2.5 分析方法

分析は、SPSS Statistics 20を使用し、単純集計、クロス集計およびt検定、カイ二乗f検定を行った。

3. 結果

3.1 サンプルの属性

表1は回答者の属性である。

まず学年は、1年生が38.6%、2年生が26.5%、3年生が19.9%であり、4年生が15.0%であった。次いで、高校時代の所属チームは、高校の部活動のチームでプレーしていた選手が84.7%、Jクラブの下部組織のチームでプレーしていた選手が11.2%、Jクラブ以外のクラブチームでプレーしていた選手が2.6%、フットサルチームが26.6%、無所属が0.3%、無回答の選手が0.3%であった。

3.2 学生の認識

3.2.1 スカウト時の学生の認識の全体の傾向

図1の通り、将来性が5.43ポイントと最も高く、学生はスカウトされる際には将来性が最も重要視されると考えている。他にも、選手個人の成績（5.10）、フィジカル測定値（4.80）、体格（4.70）

表 1 学生を対象とした調査回答者の属性

		2021年		2016年		合計	
		%	(n)	%	(n)	%	(n)
学年	1年生	38.6 %	(134)	34.1 %	(63)	37.0 %	(197)
	2年生	26.5 %	(92)	31.9 %	(59)	28.4 %	(151)
	3年生	19.9 %	(69)	32.4 %	(60)	24.2 %	(129)
	4年生	15.0 %	(52)	1.6 %	(3)	10.3 %	(55)
	合計	100.0 %	(347)	100.0 %	(185)	100.0 %	(532)
高校時代の所属チーム	高校のチーム	84.7 %	(294)	78.9 %	(146)	82.7 %	(440)
	Jクラブの下部組織	11.2 %	(39)	16.2 %	(30)	13.0 %	(69)
	Jクラブ以外のクラブチーム	2.6 %	(9)	2.7 %	(5)	2.6 %	(14)
	フットサルチーム	0.9 %	(3)	0.0 %	(3)	0.6 %	(3)
	無所属	0.3 %	(1)	0.0 %	(1)	0.2 %	(1)
	無回答	0.3 %	(1)	2.2 %	(4)	0.9 %	(5)
	合計	100.0 %	(347)	100.0 %	(185)	100.0 %	(532)

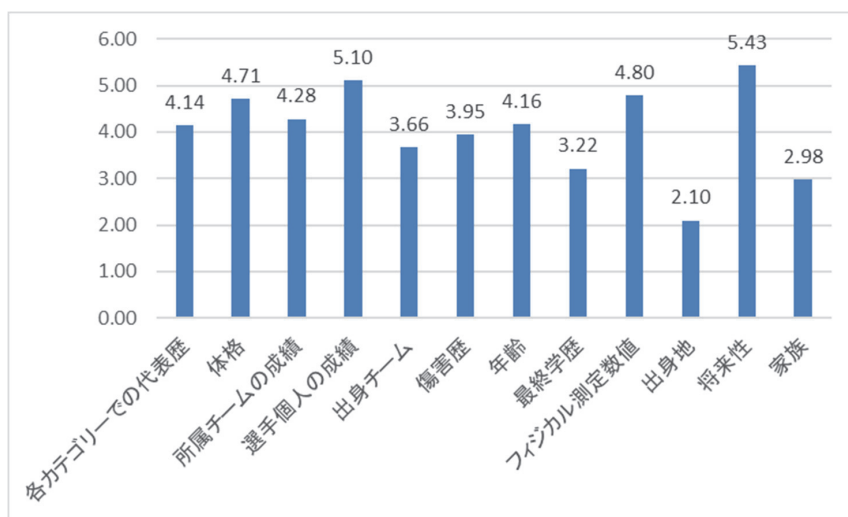


図 1 スカウトする際に重要視される点についての学生の認識

が高くなっており、逆に、出身地 (2.10) や家族 (2.98), 最終学歴 (3.22), 出身チーム (3.66) は低くなっていたことから、個人の成績とともに、身体的な特性など個人が重要視されると考えられていることが示唆される。

次に、Jクラブの採用担当者が選手をスカウトする際に考慮する点について、学生自身がどのように認識しているかについて聞いた (図2)。

学生は、自分のことを「プライベートの心配がなく」(4.71), 「人間性が良い」(4.51) として、人間としての魅力があると感じているとともに、「伸びしろがある」(4.42), 「チームに溶け込みや

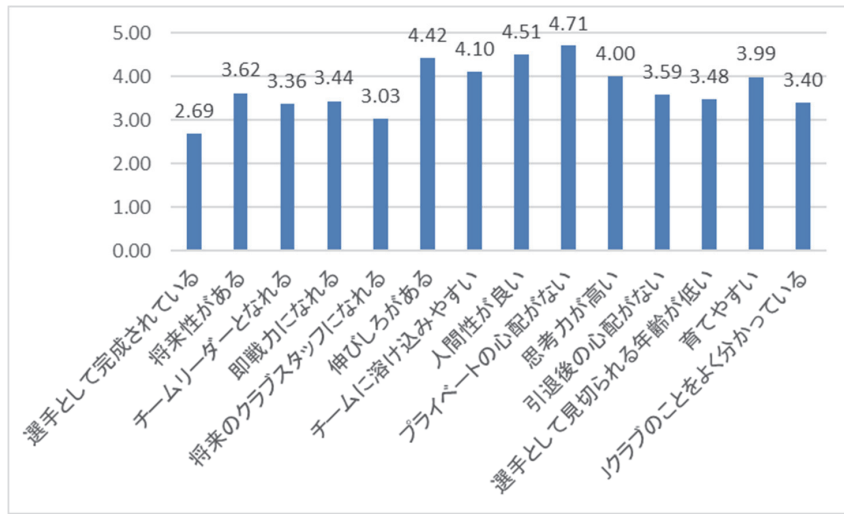


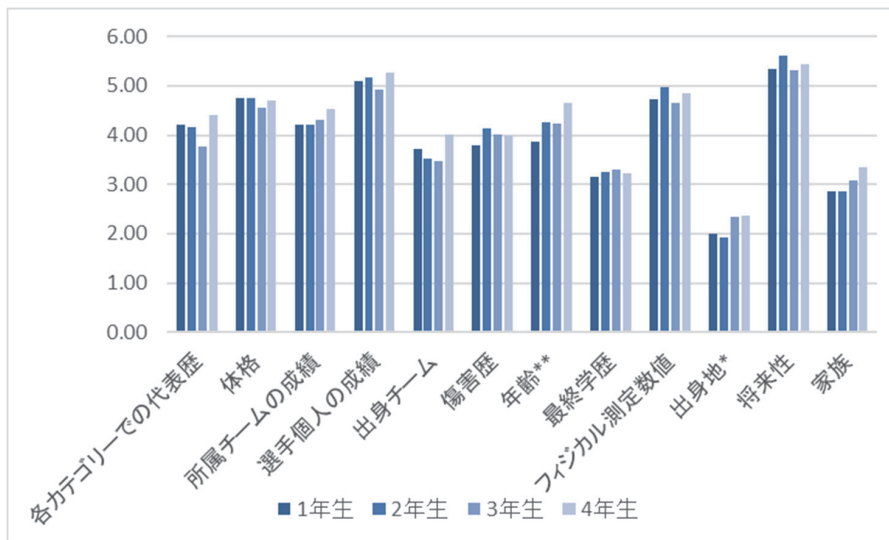
図2 スカウトする際に考慮されるポイントに対する学生の自己認識

すい」(4.10), 「思考力が高い」(4.00)として, 新しいチームに入ってからそのチームに溶け込みやすく, レベルアップする人間であると認識している。

逆に, 「選手として完成されている」という数値が2.69ポイントと最も低くなっていることから, 今現在の実力よりも将来性を評価してもらうように期待していると考えられる。

3.2.2 スカウト時の学生の認識の学年による比較

そして, 図3, 表2は学年で比較したものである。



**p>0.01, *p>0.05

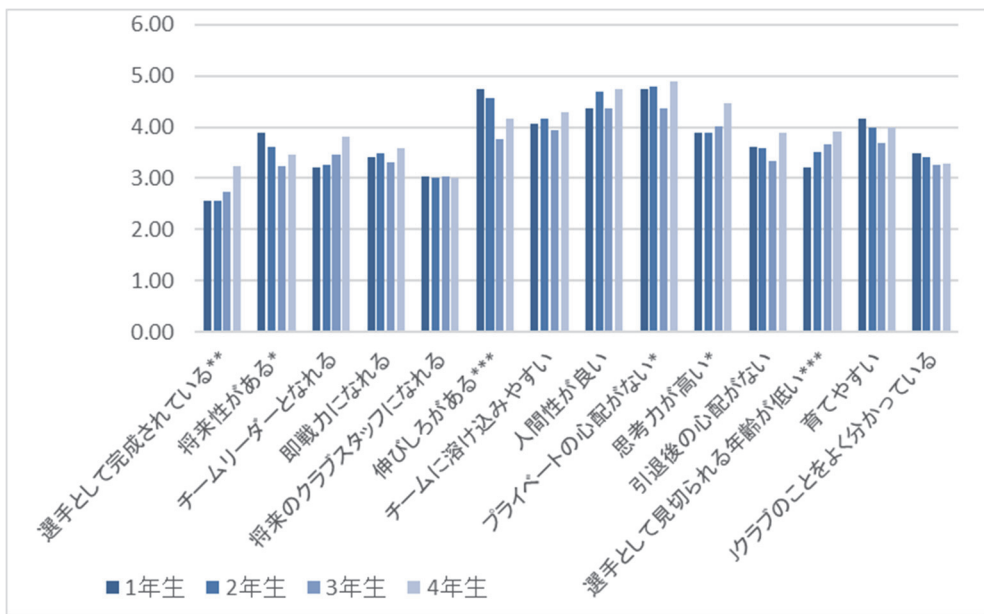
図3 スカウトする際に重要視される点についての学生の認識 (学年比)

有意差が見られた項目は、年齢と出身地であった。Jリーグの各クラブが、入団してから解雇するまでの期間が短くなっており、高卒より大卒の方がより短い（Jリーグ資料）中で、年齢が関係してくることを、学年が上がるに連れて、より意識してくるのかもしれない。なお、多くの項目

表2 スカウトする際に重要視される点についての学生の認識（学年比）

	1年生	2年生	3年生	4年生
各カテゴリーでの代表暦	4.21	4.17	3.78	4.40
体格	4.76	4.76	4.55	4.71
所属チームの成績	4.20	4.22	4.32	4.54
選手個人の成績	5.09	5.17	4.91	5.27
出身チーム	3.72	3.52	3.49	4.02
傷害暦	3.78	4.14	4.01	3.98
年齢**	3.87	4.25	4.25	4.65
最終学歴	3.14	3.25	3.29	3.24
フィジカル測定数値	4.73	4.97	4.65	4.86
出身地*	2.00	1.91	2.33	2.37
将来性	5.35	5.61	5.32	5.45
家族構成	2.87	2.87	3.07	3.34

**p>0.01, *p>0.05



***p>0.001, **p>0.01, *p>0.05

図4 学生のスカウトする際に考慮されるポイントに対する自己認識（学年比）

表3 学生のスカウトする際に考慮されるポイントに対する自己認識 (学年比)

	1年生	2年生	3年生	4年生
選手として完成されている**	2.57	2.55	2.72	3.24
将来性がある*	3.89	3.61	3.23	3.45
チームリーダーとなれる	3.22	3.25	3.46	3.80
即戦力になれる	3.41	3.49	3.30	3.59
将来のクラブスタッフになれる	3.04	3.00	3.04	3.00
伸びしろがある***	4.75	4.55	3.77	4.18
チームに溶け込みやすい	4.07	4.16	3.94	4.29
人間性が良い	4.36	4.68	4.38	4.75
プライベートの心配がない*	4.75	4.80	4.38	4.90
思考力が高い*	3.90	3.88	4.01	4.47
引退後の心配が少ない	3.61	3.58	3.35	3.88
選手として見切られる年齢が低い***	3.20	3.51	3.66	3.90
育てやすい	4.16	3.98	3.68	3.98
Jクラブのことをよく分かっている	3.49	3.42	3.26	3.29

***p>0.001, **p>0.01, *p>0.05

で、学年が上がるほど数値が高くなっていったことも、学年が上がるに連れてスカウトが様々なことを重要視していることを実感してくるからかもしれない。

また、学生のスカウトする際に考慮されるポイントについても学年別に比べた結果(図4, 表3), 「選手として完成されている」「将来性がある」「伸びしろがある」「プライベートの心配がない」「思考力が高い」「選手として見切られる年齢が低い」という項目については有意差が見られた。「将来性がある」「伸びしろがある」という項目は下級生の方が高く、「選手として完成されている」「プライベートの心配がない」「思考力が高い」「選手として見切られる年齢が低い」は上級生の方が高くなっていったことから、上級生の方がスカウトが求める自分自信のことを分かっていることが示唆される。

3.2.3 スカウト時の学生の認識の出身チームによる比較

次に、出身チームによる比較を行った(図5, 表4)。なお、無所属は1名しかいなかったことから、分析対象からは外すこととした。

スカウトする際に重要視される点について試合をしているリーグによって比較をしたところ、出身チームによる違いは見られなかった。

そこで、スカウトする際に考慮されるポイントに対する自己認識についても出身チームによる比較を行った(図6, 表5)。

その結果、全体的にJクラブの下部組織出身の選手の数値が高くなっていった。中でも「チームリーダーとなれる」「チームに溶け込みやすい」「Jクラブのことをよく分かっている」という3項目については有意差がみられた。「チームリーダーとなれる」については、高校のチーム出身の選手3.30ポイント、Jクラブの下部組織の出身選手が3.97ポイント、Jクラブ以外のクラブチーム出身の選手3.56ポイント、フットサルチーム出身の選手1.33ポイントとなっており、また、「チーム

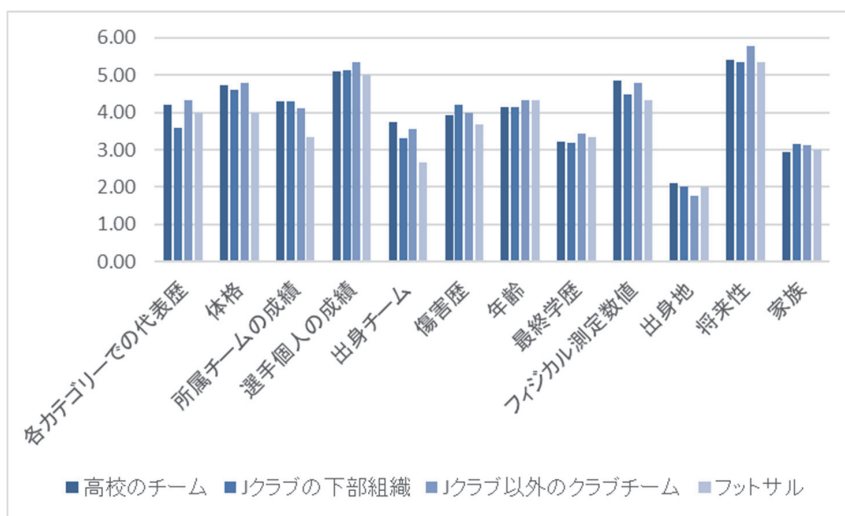
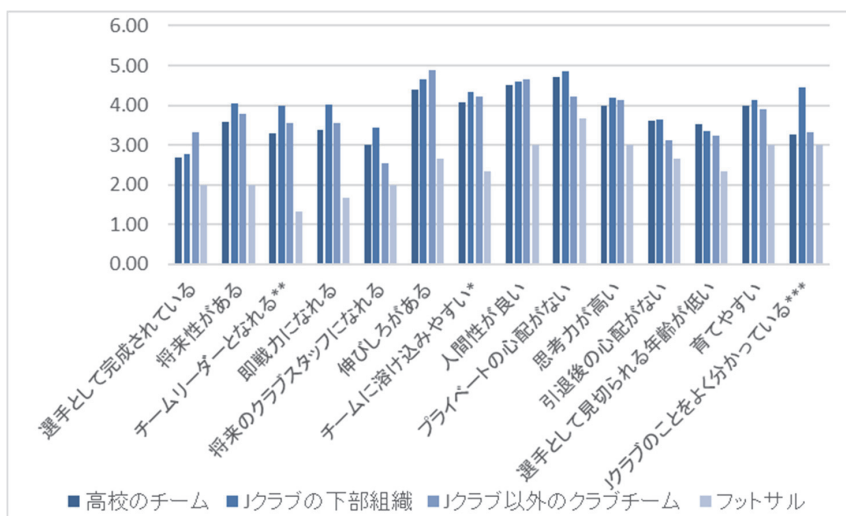


図5 スカウトする際に重要視される点についての学生の認識 (所属リーグ比)

表4 スカウトする際に重要視される点についての学生の認識 (所属リーグ比)

	高校のチーム	Jクラブ下部組織	Jクラブ以外のクラブチーム	フットサルチーム
各カテゴリーでの代表歴	4.22	3.59	4.33	4.00
体格	4.73	4.62	4.78	4.00
所属チームの成績	4.29	4.28	4.11	3.33
選手個人の成績	5.10	5.13	5.33	5.00
出身チーム	3.73	3.31	3.56	2.67
傷害歴	3.91	4.21	4.00	3.67
年齢	4.16	4.15	4.33	4.33
最終学歴	3.21	3.18	3.44	3.33
フィジカル測定数値	4.84	4.49	4.78	4.33
出身地	2.11	2.03	1.78	2.00
将来性	5.42	5.36	5.78	5.33
家族構成	2.94	3.15	3.11	3.00

に溶け込みやすい」という項目についても、高校のチーム出身の選手4.08ポイント、Jクラブの下部組織の出身選手が4.33ポイント、Jクラブ以外のクラブチーム出身の選手4.22ポイント、フットサルチーム出身の選手2.33ポイントとなっていた。そして、「Jクラブのことをよく分かっている」については、高校のチーム出身の選手3.27ポイント、Jクラブの下部組織の出身選手が4.46ポイント、Jクラブ以外のクラブチーム出身の選手3.33ポイント、フットサルチーム出身の選手3.00ポイントとなっていたが、これは、自分がJクラブの一員であったためであろう。全体として、Jクラブの下部組織の出身の選手は、Jクラブのスカウトが何を求めているのかなど、Jクラブのことをよく分かっている中で、プロになることを目標とし、カテゴリーが上がるごとにセレクトされる中で生き残ってきた選手であることから、様々な自信となっているのではないだろうか。



***p>0.001, **p>0.01, *p>0.05

図6 学生のスカウトする際に考慮されるポイントに対する自己認識（出身チーム比）

表5 学生のスカウトする際に考慮されるポイントに対する自己認識（出身チーム比）

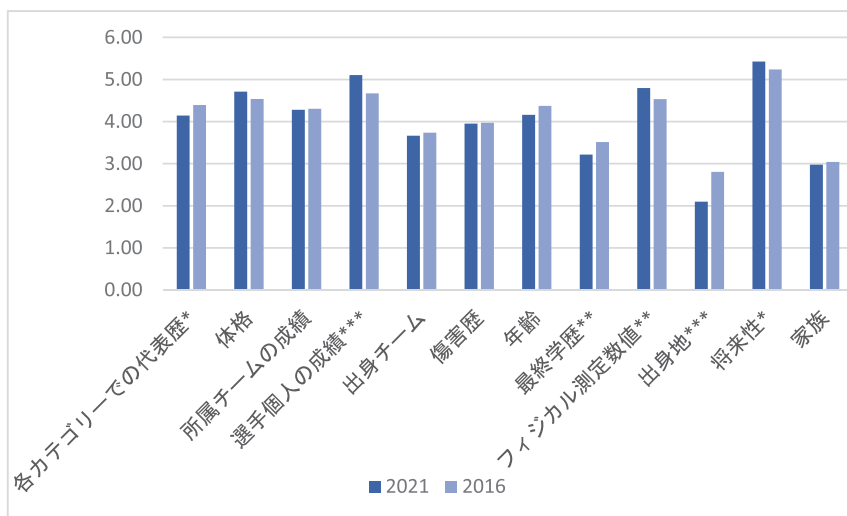
	高校のチーム	Jクラブの下部組織	Jクラブ以外のクラブチーム	フットサルチーム
選手として完成されている	2.68	2.77	3.33	2.00
将来性がある	3.58	4.05	3.78	2.00
チームリーダーとなれる**	3.30	3.97	3.56	1.33
即戦力になれる	3.38	4.03	3.56	1.67
将来のクラブスタッフになれる	3.00	3.44	2.56	2.00
伸びしろがある	4.38	4.64	4.89	2.67
チームに溶け込みやすい*	4.08	4.33	4.22	2.33
人間性が良い	4.51	4.59	4.67	3.00
プライベートの心配がない	4.72	4.85	4.22	3.67
思考力が高い	3.98	4.18	4.13	3.00
引退後の心配が少ない	3.61	3.64	3.11	2.67
選手として見切られる年齢が低い	3.51	3.36	3.22	2.33
育てやすい	3.98	4.13	3.89	3.00
Jクラブのことをよく分かっている***	3.27	4.46	3.33	3.00

***p>0.001, **p>0.01, *p>0.05

3.3 2016年との調査との違い

スカウトする際に重要視される点を2016年に実施した調査との違いを分析した（図7，表6）。

有意差が見られたものとしては、「各カテゴリーでの代表歴」（2021年4.14，2016年4.39）、「最終学歴」（2021年3.22，2016年3.51）、「出身地」（2021年2.10，2016年2.81）は2016年の方がポイントが高くなっており，逆に，「選手個人の成績」（2021年5.10，2016年4.67）、「フィジカル測定値」（2021年4.80，2016年4.54）、「将来性」（2021年5.43，2016年5.24）と2021年の調査の方が高くなっていった。したがって，2016年に実施された前回の調査時よりも，今回（2021年）の調査の



***p>0.001, **p>0.01, *p>0.05

図7 スカウトする際に重要視される点についての2016年の調査との違い

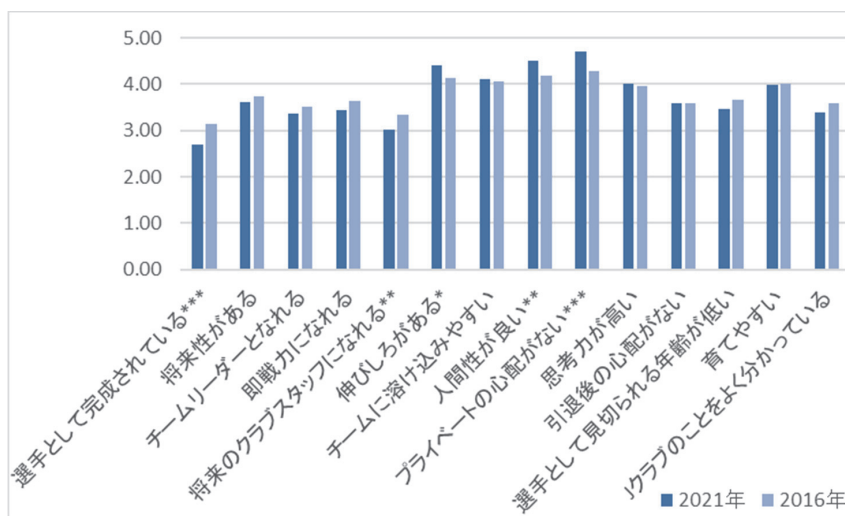
表6 スカウトする際に重要視される点についての2016年の調査との違い

	2021年	2016年
各カテゴリーでの代表歴*	4.14	4.39
体格	4.71	4.54
所属チームの成績	4.28	4.31
選手個人の成績***	5.10	4.67
出身チーム	3.66	3.74
傷害歴	3.95	3.97
年齢	4.16	4.37
最終学歴**	3.22	3.51
フィジカル測定数値**	4.80	4.54
出身地***	2.10	2.81
将来性*	5.43	5.24
家族構成	2.98	3.04

***p>0.001, **p>0.01, *p>0.05

方が、個人的な要因を重要視されていると感じているようである。前回の調査において、スカウト担当者は「将来性」「体格」「傷害歴」「年齢」を重要視し、「出身地」、「最終学歴」「家族構成」は重要視していなかった。有意差は見られなかったが、「体格」は今回の調査の方が高く、「家族構成」は今回の方が低くなっていたことから、2016年の調査時よりもスカウトが重要視していることを分かってきているのかもしれない。

そして、学生がスカウトされる際に重要視されていると考えるポイントについても、2016年との違いについて分析を行った(図8, 表7)。



***p>0.001, **p>0.01, *p>0.05

図8 学生のスカウトする際に考慮されると考えるポイントの2016年との違い

表7 学生のスカウトする際に考慮されると考えるポイントの2016年との違い

	2021年	2016年
選手として完成されている***	2.69	3.15
将来性がある	3.62	3.74
チームリーダーとなれる	3.36	3.52
即戦力になれる	3.44	3.65
将来のクラブスタッフになれる**	3.03	3.35
伸びしろがある*	4.42	4.14
チームに溶け込みやすい	4.10	4.05
人間性が良い**	4.51	4.18
プライベートの心配がない***	4.71	4.29
思考力が高い	4.00	3.97
引退後の心配が少ない	3.59	3.60
選手として見切られる年齢が低い	3.48	3.65
育てやすい	3.99	4.01
Jクラブのことをよく分かっている	3.40	3.59

***p>0.001, **p>0.01, *p>0.05

「選手として完成されている」「将来のクラブスタッフになれる」という項目については、2016年時の調査よりも有意に低くなっており、逆に、「伸びしろがある」「人間性が良い」「プライベートの心配がない」については有意に高くなっていった。2016年の調査において、スカウト担当者は高校生よりも大学生をスカウトする際には、「即戦力となれる」か「選手として完成されている」

「チームリーダーとなれる」、「人間性が良い」、「プライベートの心配がない」、「思考力が高い」という点を重要視していたことから、前回の調査よりもスカウトが重要視する点を自分の売りにできるようにしているようである。

4. まとめ

本研究の目的は、5年前と現在の違いに着目し、5年前の大学生サッカー選手と現在の大学生サッカー選手のスカウト時の意識と、大学生サッカー選手がプロになるために重要な点を明らかにすることで、大学サッカーの意義を明らかにすることであった。

調査の結果、大学生は、個人の成績とともに身体的な特性など個人が重要視されると考えているが、スカウトでは今現在の實力よりも将来性を評価してもらうように期待している。また、学年が上がるに連れてスカウトが重要視していることが分かってくるとともに、そのスカウトが求める項目について自分自信の状態を自覚できるようになる。スカウトする際に重要視される点についての認識は出身チームで違いはないが、Jクラブの下部組織の出身の選手は、Jクラブのスカウトが求めている項目を持っていると思っている。そして、2016年の調査時よりもスカウトが重要視していることを分かってきており、スカウトが重要視する点を自分の売りにできるようにしているようであることが明らかになった。

したがって、スカウトの差異に重要視される点について、スカウト担当者と学生の考えには差異がある（前田ら、2017）が、以前よりも学生はスカウト・Jクラブが何を求めているかを理解してきているようである。

だが、人間性を高めるとともに、プレー面においても即戦力となれるようなレベルにならないといけないことについて、まだまだ自覚が足りない部分もあることから、学生はもちろんのこと、指導者もスカウトがどのような選手を欲しがっているのかを自覚して、その項目を延ばしていく必要がある。特に近年は、技術だけでなく、体力や守備力が必要なハードワークできる選手が求められるようになってきている。また、ひとつのポジションに秀でている特徴があるだけではプロでは通用しなくなっており、ポジションチェンジができる、いくつものポジションができる選手が求められるようになるなど、要求が高くなってきているが、高校生のときにはその要求レベルに達していなかった選手が、大学で指導を受けて伸びることがある。柏レイソルの下部組織でプレーし、高校卒業時にはプロになれなかったが、大学サッカーにおいて成長したことで、3年時に柏レイソルに内定が出た落合選手がこれに当たるであろう。総じて、人間性とサッカーのプレー、両方の面において、大学サッカーはサッカー選手として成長できる4年間となるのではないだろうか。

参考文献

- ・古谷 駿・粟木一博（2015）デュアルキャリアに関する学生アスリートの意識と大学における支援の在り方についての研究. 仙台大学大学院スポーツ科学研究科修士論文集, (16), 125-131.
- ・八田直紀・清水安夫・大後栄治（2012）大学生アスリートのライフスキル獲得に関する研究——コミットメント・情熱・ストレスとの関係性に着目した検討——. 学校メンタルヘルス, 15 (2), 260-267.
- ・上代圭子（1999）プロサッカー選手のセカンドキャリア. 順天堂大学卒業論文.
- ・上代圭子（2005）プロサッカー選手のキャリアトランジションに関する研究——パラサイト化するJリーガー——. 順天堂大学大学院修士論文.
- ・上代圭子・野川春夫（2013）日本人元プロサッカー選手のキャリアプロセスに関する研究——自主的な引

- 退と非自主的な引退に着目して——. 生涯スポーツ学研究, Vol. 9, No. 1・2, 19-31.
- ・上代圭子・田紀与美・三科真澄・城戸絵理沙・高木彩圭・古葉隆明 (2016) 大学スポーツ界におけるスカウト活動に関する研究. 東京国際大学論叢 人間科学・複合領域研究 第1号.
 - ・木内敦詞・奈良雅之・島本好平 (2013) ラウンドテーブル 学生アスリートのキャリア支援を考える. 大学教育学会誌, 35 (2), 61-65.
 - ・久保田洋一・野川春夫・末永 尚・重野弘三郎 (2002) プロサッカー選手のセカンドキャリアチェンジ——役割卒業理論 (Role Exit Theory) を援用して——. 順天堂大学スポーツ健康科学研究, 6, 106-116.
 - ・前田秀樹・後藤義一・上代圭子 (2017) 大学サッカーにおけるスカウト時のポイントに関する研究. イベント学研究, 2 (1), 37-47.
 - ・文部科学省 (2016) 大学スポーツの振興に関する検討会議中間とりまとめ～大学のスポーツの価値の向上に向けて～.
 - ・大場ゆかり・徳永幹雄 (1999) アスリートの「競技引退イメージ」に関する考察——競技引退生起条件との関連性——. 日本体育学会第50回記念大会／体育・スポーツ関連学会連合大会号, 349.
 - ・大場ゆかり・徳永幹雄 (2002) 競技引退観検査とインタビュー法によるスポーツ選手の競技引退観に関する研究. 健康支援, 4 (1), 11-19.
 - ・重野弘三郎 (1999). プロサッカー選手のセカンドキャリア到達過程に関する研究——Role Exit Theoryに着目して——. 鹿屋体育大学修士論文.
 - ・清水聖志人・島本好平 (2011) 大学生トップアスリートのキャリア形成とライフスキル獲得との関連. 日本体育大学紀要, 41 (1), 111-116.
 - ・清水聖志人・島本好平 (2014) 大学トップアスリートにおけるキャリア教育プログラム作成に向けた縦断的検討. SSF スポーツ政策研究, 3 (1), 48-53.
 - ・豊田則成 (1999) アスリートの競技引退に伴うアイデンティティ再体制化に関する研究——中年期危機を体験した元オリンピック選手——. 日本スポーツ教育学研究, 19 (2), 117-129.
 - ・豊田則成・中込四郎 (1996) 運動選手の競技引退に関する研究——自我同一性の再体制化をめぐる——. 体育学研究, 41 (3), 192-205.
 - ・豊田則成・中込四郎 (2000) 競技引退に伴って体験されるアスリートのアイデンティティ再体制化の検討. 体育学研究, 45 (3), 315-332.
 - ・筑波大学トップアスリート・セカンドキャリア支援プロジェクト編 (2006) トップアスリートのセカンドキャリア支援教育のためのキャリア開発 (1) 研究の構想基礎的研究を中心に, 筑波大学トップアスリート・セカンドキャリア支援プロジェクト.
 - ・筑波大学トップアスリート・セカンドキャリア支援プロジェクト編 (2007) トップアスリートのセカンドキャリア支援教育のためのキャリア開発 (2) 基礎研究からカリキュラム開発へ, 筑波大学トップアスリート・セカンドキャリア支援プロジェクト.
 - ・生方 謙・田中靖久・浜野 学 (2011) アスリート学生のキャリア選択: 体育会所属学生と一般学生の比較. 運動とスポーツの科学, 17 (1), 123-128.
 - ・Williams, A. M., & Reilly, T. (2000) Talent identification and development in soccer. J Sports Sci, 18 (9), 657-667.
 - ・山本浩二・島本好平・岡田龍司・岡崎祐史・中山忠彦・矢野裕介 (2016) 大学生柔道選手におけるライフスキル獲得とキャリア成熟との関連. 神戸医療福祉大学紀要, 17 (1), 107-115.
 - ・山本浩二・島本好平 (2019) 大学生柔道選手におけるライフスキル獲得がキャリア成熟に及ぼす影響. 体育学研究, 64 (1), 335-351.
 - ・吉田 毅・松尾哲矢・山本教人・谷口勇一 (1999) スポーツ選手のスポーツキャリア形成過程をめぐる日本の特徴: 第18回ユニバーシアード競技大会参加選手の国際比較調査から. 健康科学, 20, 63-76.
 - ・静岡朝日テレビニュース&ブログサイト LOOK HP https://look.satv.co.jp/_ct/17418741
 - ・UNIVAS 公式HP <https://www.univas.jp/about/>